

イギリス新教育思想¹における「自由」の宗教的性格

—なぜ哲学者 J.S. マッケンジーは「教育の新理想」運動にコミットしたのか—²

山崎 洋子

(キーワード: 「教育の新理想」運動, J.S. マッケンジー, M. マッケンジー, ホームズ, イギリス新教育運動, 自由, カーディフ大学)

1. はじめに—問題意識と視座—

社会と学校、学校と社会、とりわけ近代以降のそれら双方の関係は極めて不可分である。そのことは、現代のわが国の教育改革を瞥見しただけでも容易に理解できる。たとえば、経済活動の低迷に端を発する「独創的人材の育成」という学校教育への経済界からの要求が、従来の画一主義的な教育から個性的・創造的な教育へ、また、公教育の原理から市場原理への転換を導いているが、これもその現れであろう。この政治的・経済的な力が学校の内実を左右する所以は、機会均等の原則をもって一般市民に平等に開かれた学校システムが、既存社会の一般意志によって作られた産物だからである。それゆえ、教育改革の吟味検討に際しては、その意味内容を社会的コンテクストに位置づけつつ、双方の視座から解釈することが必要になるのである。しかし、それに加えて熟慮を要するのは、その社会を構成している人間をどのように捉えるか、また同時にその人間を何らかのかたちで支える宗教的な何ものかをどのように捉えるか、という教育につきまとう根源的な問いである。このことは、近代以前の学校が何らかの宗教を背景にして、人間を陶冶し訓育してきた歴史に端的に示されている。社会と学校が不可分であるのと同程度に、宗教と教育の不可分性も認められるのであり、イギリスの私営学校 (Independent School) が、この枠組みに疑念を差し挟む余地を与えないのはこのゆえなのである。ただ、このことを了解したとしても、それぞれの宗教が依拠する人間観によって教育のベクトルは異なる。また、それは独善的なものであってはならず、その妥当性については極めて慎重な議論が必要になる。ここに哲学の介在の余地が立ち現れるのであり、その探究の知見を得てこそ教育改革に新たな息吹がもたらされるのである。

実は、本稿が着目するイギリスの新教育運動は、このような教育をめぐる改革の諸相をリアルに示した歴史事象なのであり、その思想は「自由を求める多様で多義的な教育改革思潮」と概括的に表現することができる。その背景には、この運動が一連の公教育制度の成立過程で生起し、非国教会派に属する大学人や視学官、教師を擁

して展開されたという事実があり、それがこの運動を特徴づけている。そして、軽視しがたいのは、新教育運動への参画者が共通に、教育という営為が教育として存立し得る根拠を模索していたことである。それはこの史実のなかに、学校教育では人間の生を支える支柱・理念・信念はどのように捉えられるべきか、という問いが提起されていることに窺われる。その問いとは、いわば「宗教的な何ものか」と集約することができるが、これは教育という営為の根拠をなしている「自由」の問題と通底する。また、そのことは、イギリスにおいては公教育の三大原則、つまり義務、強制、世俗の原則は妥当しないという近年の報告や³、イギリスでは国民教育という考えは、1988年教育法以前には存在しなかったという研究⁴にも連なる問いなのである。

このような問題意識の下、本稿ではイギリスの新教育運動がめざした「自由」の宗教的側面を描出し、その改革思想のなかに潜在する「自由」の宗教的な意味内容を見いだすことを目的とする。具体的には、まず最初に、自由を標榜する新教育運動の社会的側面について概括的に述べ、次に、イギリス新教育運動の先駆的組織「教育の新理想」の運動⁵に、社会哲学及び倫理学の領域から関与した J.S. マッケンジー (J.S. Mackenzie, 1860-1935) の活動の変遷を考察する。その際に、新教育運動の主導者であり元勅任視学官であったホームズ (E.G.A. Holmes, 1850-1936)⁶や「教育の新理想」の活動を推進させていった J.S. マッケンジーの妻で教育学者であった M. マッケンジー (Millicent Mackenzie, 1863-1942)⁷に目を向けつつ、彼らの活動の変遷をも明らかにする。そして、その次に、J.S. マッケンジーがなぜ神秘思想に傾倒しつつ教育改革にコミットしていったのか、その目的はどのようなものであったのかを明らかにする。そして、これらを通して、「新理想」を掲げた新教育運動の改革準拠軸、すなわち自由の宗教的性格を描出する。なお、ここで取り上げる各章の内容は、本来ならば一つのテーマとして論究すべきものであるが、三者の関係を全体的に俯瞰することが、必要であると判断したため、まず三者の相關関係を視野に入れつつ J.S. マッケンジーの新教育運動へのコミットの内実を描出することとする。

2. 新教育運動の社会改革的側面

新教育運動の史的解釈において、イギリスにその端緒があると捉えられるのは、ラスキン主義の影響を受けたレディ (Reddie, Cecil, 1858-1932) やカーペンター (Carpenter, J. Edward, 1844-1929) らが創設したアボッツホーム校 (Abbotsholme School, 1889-) の教育思想がドイツやフランスへと伝播していったことを根拠としている。新生活連盟 (Fellowship of the New Life, 1883-?)⁸ のメンバーであった彼ら創設者は、物質主義・機械主義の進行への批判をもち、当時の伝統的なパブリック・スクールが社会的な課題に応答していない状況を憂慮していた。同時期には、菜食主義者、トルストイアン、クエーカー教徒、神智学徒らのかかわるガーデンシティ運動も展開され、この運動に関わっていた新生活連盟の彼らは、生徒と学校との間の乖離が進行しつつあることを危惧し、内容・方法共に新しい教育を求める運動を唱導したのであった。以後、バドレー (Badley, J.H., 1865-1967) のビデールズ校 (Bedales School, 1893-) や進歩的な親によって作られた男女共学のキング・アルフレッド校 (King Alfred School, 1898-) など、既存のパブリック・スクールが為し得ない教育内容や教育方法を取り入れた「新学校 (New School)」の創設の動きは活発になり、後にそれに関与し共鳴した人々は、新教育として括られる運動の火付け役を担っていくことになる。

こうした動向に押されつつ生起するのが、幼児や子どもを対象とした初等段階の教育改革運動である。それは、「出来高払い制 (Payment by Results)」(1862-1895) の悪弊が残っていた初歩学校 (Elementary School) の悲惨な実態に心を痛め、そのような貧しい学校の子どもたちを救済しようとした視学官や教育行政官がパイオニアとなって主導した。先に述べたように、この時期には、既に「出来高払い制」は廃止されていたが、助成金獲得を目指した訓練主義と体罰主義は、相反する子ども観、すなわち原罪観とロック (J. Locke, 1632-1704) の人間白紙説 (white paper) あるいはタブラ・ラサ (tabula rasa) に支えられていたため、その後も教育の方向を規定していた。また、制度的には、この時期は、いわゆるバルフォア・モラント教育法 (Education Act 1902)、1904年教育令 (Elementary Code 1904)、児童憲章 (The Children Act, 1908)、そしてフィッシャー教育法 (Education Act 1918) などが制定された時期に相当し、そこには、優秀で強健な労働者の育成という産業的課題と救貧・救済という社会的・福祉的課題とが無理なく合致する状況があった。また、フェビアン協会が課題とした労働者の学習保障の要求も根強く続いていた。つまり、このように錯綜するベクトルには、大英帝国の政治的・経済的・社会的な諸問題が複合的に絡まって存在していたのである。それゆ

え、このことが宗派を超えた公教育体制の確立を促し、多方向からの進入経路を開示した、と捉えることができる。が、しかし、教育に対する国家的介入の路が容易に創出されたわけではない。なぜなら、新教育を求める運動が「自由」という中心的テーマに収斂させていったことからわかるように、公的な「教育」と「内心の自由」双方を充足させようとする形式の確立は、とりわけイギリスでは、積年の懸案事項であったからである。ここにイギリスが新教育の嚆矢となった理由の一つが存在するが、今日的観点からもなお留意すべきは、教育という営為が内心の問題を不可避とする特殊性をもっている点である。しかも、その時期は、地方教育当局の設立した師範学校 (Training College) 出身の教師が増え、彼らが従来の固定的な子ども理解と異なる観察や実践を報告し始めた時期でもある。これは原罪観でもロック的人間観でもない子ども像の提示であった。観点を変えるならば、それは公教育改革に社会的・宗教的背景の異なる人々の参画する余地が生じたことを意味し、そのことによって特殊イギリスの新教育の思想的重層性が現れる途が生まれたのである。

このことは、新教育運動が、公教育制度の完成・確立という近代国家必須の政策への疑念を内包して生じたことと通底している。なぜなら、公教育制度が前提とするのは、原罪を背負った子ども、教育されなければならない存在としての子どもと規定する考えだからである。周知のように、近代化以降の非国教会派の人々は、公教育の理念によって隠蔽されざるを得ない「内心の自由」の問題を追求し、国家的価値観の強要に反対してきた。それゆえ、1910年代半ばに生起した「教育の新理想 (New Ideals in Education, 1914-1939)」運動を強力に押し進めようとしたのが、為政者の価値観に懐疑的な人々であったのは、当然の帰結といえることができる。

さて、この「教育の新理想」は、新教育運動の先駆形態として位置づけることができるが、その運動を主導したのは、前勅任主任視学官ホームズ、労働者教育協会の創始者マンスブリッジ (A Mansbridge, 1876-1952)、当時、王立委員会議長をしていたリットン (Bulwer-Lytton, Victor Alexander George Robert, second Earl of Lytton, 1876-1947)、リットンの姉のバルフォア夫人 (Lady Betty Balfour, Lady second Earl of Balfour, ?-1942)、マッケンジー夫妻、リーズ大学の副学長サドラー (Michael. E. Sadler, 1861-1943)、男女共学を推進したウッズ (Alice Woods, 1849-1941)、前勅任視学官エンソア (Beatrice Ensor, 1885-1974) ら、教育のパイオニアと称されるべき人々であった。この組織は自由を維持するため、初期の段階では、非形式性を重視した。また、この組織が開催する「教育の新理想」年次会議 (1914-1939) への参加者数は、1918年及び1919年になると第一次世界大戦

の終結の影響が加わって急激に増大していくが、とりわけ着目したいのは、彼ら参画者の宗教的・思想的背景であり、またそれに起因する社会改革的意識である。しかも、その考えには、総じて近代的合理主義への批判があった。デカルトに端を発する近代の合理主義は、理論や理念を援用して価値づけたある基準によって境界を設定して分析し、その結果を全体に還元する傾向を強めていた。それゆえ、科学的アプローチに偏重した機械的合理主義の様相はますます深まっていたのである。また、この思考法に基づいて施行された「出来高払い制」の影響は、それが廃止された20世紀に入っても、学校現場に色濃く残っていたため、このことを問題視し、画一的な国民統合を批判した労働者階級や非国教会派の人々、さらには学校の実態を憂慮していた視学官らが連携し、新しい教育を提唱したのは、ゆえなきことではなかったのである。観点を変えるならば、このパイオニアの協力体制は「出来高払い制」の廃止ゆえに生まれたのであり、またそれゆえ、新教育運動は運動としての強い契機を持ち得たのである。したがって、そのモチーフ、すなわち「自由」・「解放」は、公教育システムに不可避の「内面世界の介入」を阻止すること、つまり「自由」の標榜なのであり、それは諸宗派の人々の結束に基づいていたのである。換言するならば、「自由」を掲げた教育の運動は、社会的な諸要因による複合的ダイナミズムによって生まれたものなのであり、それが教育の公的保障と「内心の自由」の双方を求めたために、長期にわたって展開される力を持ち得たのである。

その初歩段階の教育改革運動を主導・支援したのが、オックスフォードやケンブリッジを卒業して労働者やその子どもたちの教育にかかわっていた、いわゆる「市民的学者」・「急進派的・社会改革的インテリゲンチヤ」と称される人々であり、同時にパイオニアとも称される人々であった。彼らは多様な知的ネットワークを形成して精力的に活動するが、その内実からは、実は、19世紀末から20世紀にかけて生じた社会運動と新教育運動との密接な関係が認められる。そして、その橋渡しをしたのが、大学拡張運動や労働者教育運動の洗礼を受けた「大学人」と称される人々であったのであり、このことは、教育問題が社会改革と不可分であることの証左となっている。

3. 「教育の新理想」と大学人

—社会的課題および宗教的課題の探究—

(1) 「教育の新理想」の特徴

—「子どもの自由」と「経験」をどう捉えるか—

では、なぜ社会改革を志向した大学人は新教育を求めたのであろうか。その答えは当時の大学人固有のメンタ

リティと深く関わっている。実は、新教育運動に関与した大学人は、また近代人としての「漂白と苦悩」というフレーズで特徴づけることができる層の人々でもあった。血と土に基づいた身分制を破棄する近代の能力主義は、「自分は何者であるのか」、「自己の実現とはいかなることか」を問うことを不可避とし、このことを介して彼らは「職業意識」を形成していった。また、大学人としての個人にも多様な意識が生じることになり、たとえば、大学改革を拒む厚い壁への葛藤、既存体制の単純なる再生産への危惧、社会的な諸課題の増大への危機意識など、多種多様な諸要因が絡み合っ、批判意識が形成されていったのである。虚無感の漂う社会の中で、漂白する自己を内に留めねばならない近代人「インテリゲンチヤ」とは、教養主義を批判したマシュー・アーノルド⁹の影響を受けつつ、教養教育論や生き方論をそれぞれに展開し、他方では、「自然」を賛美したロマン派詩人の影響を受けつつ「子どもの教育」を注視していった革新的意識の持ち主だったのである。しかし、伝統重視の精神は教育の世界においても根強く残り、とりわけ、大衆を対象とした公教育制度が検討された19世紀末のイギリスは、キリスト教の原罪観とロックによる『人間悟性論 (*An Essay Concerning Human Understanding*)』(1689)の影響を払拭することができない状況にあった。なぜなら、子どものタブラ・ラサも、原罪を肯定する人間観も、外的行為を介した子どもの「経験」に着目する根拠となり得たからである。その意味でまた、協同を基本理念として社会主義を打ち立てたオーウェン (R. Owen, 1771-1858) の環境決定論も、同じベクトルを有している。なぜなら、彼の理論もまた、性格形成 (character-moulding) に向けた経験重視の教育という範疇で捉えることができるからである。それゆえ、イギリスでは、デューイのように経験概念の体系化が意図されることはなかった、と見ることができよう。

が、いずれにせよ、「経験」そのものを俎上に載せるとなれば、「人間性」「人間の本質」が何であるかの課題を避けて通ることはできないことになる。心理学草創期の当時においては、「人間の自然 (human nature)」は、まさに宗教の領域に属する課題であった。したがって、現実の世俗社会を問題視するスタンスを堅持しつつ、教育という再生産機能に委託するかたちで教育改革運動は生じていったのである。それはイギリス新教育運動家が再々用いる「自己表現」・「自己実現」・「子どもの自由」が「経験」の軽視ではなく、より強固な神的経験への顧慮を内在していたということの意味する。換言するならば、「自由」を標榜した「新理想」には、宗教的な価値や理想が暗黙に措定されていた、と見ることができる。その場合に、イギリス経験論がさらに惹起されたことはいうまでもない。が、ここで軽視しがたいのは、彼らの問

題関心の根底には、なんといっても宗教と教育との調和的關係の志向が横たわっていたことである。

その関心は、国家の指導者の育成をめざす中等段階の学校改革運動から、キリスト教（国教会の）教義の暗唱を介した陶冶に対する疑念へと拡がるが、その時期に、時宜に適ったかたちで出現したのが、イタリアの医師・モンテッソーリ（Montessori, Maria, 1870-1952）の理論と実践だったのである。「障害や問題を抱えた子どもの教育」において「自己教育（auto-education）」概念を中核に据えたモンテッソーリ法には、教育院が苦慮してきた大衆教育の枠組形成上のヒントがあった。すなわち、自らの理解を自ら修正しつつ自由に取り組んでいくことができるモンテッソーリの方法には、教育院がその受容に乗り出す社会的必然性があったといえよう。しかも、そこには、かつてブレイクやワーズワースが称えたような「無垢なる存在」「新しい自然」への注視の姿勢があり、モンテッソーリ法を改革可能性に応答し得るものである、と理想主義者が捉える余地があった。それゆえ、大学拡張運動や労働者教育運動に関与していた人々は、この点に着目したのである。

その点でアルファ・ユニオン（Alpha Union, 1908-?）のメンバーでセツルメント運動に関与していたホームズとマッケンジー夫妻は共通の場にいたということが出来る¹⁰。また、両者の関係がなければ、イギリス新教育に宗教的自由のベクトルを有した性格は誕生しなかったであろう。では、マッケンジー夫妻とホームズはいかなる問題関心をもって新教育を求めたのであろうか。また、いかなる宗教的関心をもっていたのであろうか。そこで、次に、彼ら三者の人物像に立ち入ることにしたい。

(2) マッケンジー夫妻とホームズの関心

一 神、労働、精神への問い—

元主席視学官のホームズと大学人マッケンジー夫妻との最初の出会いについては不明であるが、その接点は、宗派を超えてユートピアの共同体を探求するアルファ・ユニオンにある。アルファ・ユニオンとは、田園都市レッチワースの多様な可能性に期待したトルストイ主義者らを中核にした組織であり、それは新生活連盟（The Fellowship of New Life, 1883-1898）と神智学協会（Theosophical Society, 1875）¹¹双方にかかわる組織である。その名称は¹²、デニー（E. N. Dennys）の著作 *The Alpha: or First Mental Principle and Truth-guide to General Well-*

being and Progress—a Revelation but no Mystery に由来するが、メンバーらは、「宗教的信仰ではなく、全てを超え、全てを通じた、全ての中にある、無限に慈悲深い神の実現のなかでの教育を獲得する」ために世界の同胞に訴えたのであった。実は、この組織にかかわっていたのが、ケンブリッジのジーザス・カレッジのフェローで、マンズフィールド・ハウス・セツルメントの副所長をしていたヒューズ（W. R. Hughes）である。アルファ・ユニオンは、教育に関連したカンファレンスや移動図書館を開設する活動を中心にしていたが、その活動拠点の一つがマンズフィールド・ハウスであった¹³。M. マッケンジーは、後の1918年に、つまり「教育の新理想」会議に参加した後に、マンズフィールド・ハウスの活動に参画している。たとえば、マッケンジー夫妻は、マンズフィールド・ハウス・セツルメント（Mansfield House Settlement）の地方支部がケントン（Kenton, in Middlesex）に出来たために、その地へ夫婦で転居している。そして、ホールゼイ（Halsey）・トレーニング・カレッジの附属として、工場労働者のための継続学校（an experimental Day Continuation School）がマンズフィールド・ハウスで始められると、妻ミリセントは、その名誉施設長となり、ロンドンとケントンの両方で働いている。また、この時期、彼女はオックスフォード、ケンブリッジ、ロンドンのカレッジで、教育について講義したり、ロンドンの中央講演室（the Central Lecture Rooms, Tavistock Square）で特別招待者として講義をして教育改革運動に専念している。

以上の活動歴を一瞥するならば、彼らは20世紀初頭に出会い、教育改革の運動に専念していったのではないかと推察できる。とはいえ、ホームズとマッケンジー夫妻が教育の領域だけで連携していたとは思われない。なぜなら、「教育の新理想」に哲学者のJ.S. マッケンジーが深くコミットするには、それなりの強い動機があったのではないか、と思われるからである。教育という仕事以外に彼らを結びつけたものは何であったのであろうか。ただ、それらを解明する具体的かつ明示的な史料は存在しない。が、しかし、彼らの活動を概観すると、哲学者J.S. マッケンジーと教育学者M. マッケンジーが「教育の新理想」に深く関与していく理由が顕在化してくる¹⁴。彼らはどのような生涯を送ったのであろうか。そこで彼ら三者の略歴を下記のような表に纏めて概観することにしたい¹⁵。

< Edmond Gore Alexander Holmes (1850-1936) の略歴 >

(資料1)

年(日,月)	事 項
1850 (17 Jul.)	・アイルランドに生まれる。母親は厳格な訓練主義者(a strict disciplinarian)であった。
1863	・11歳の時にロンドンへ転居。
1874	・マーチャント・テラーズ・スクールに入学する。この時期、強い罪の意識を持っていた。

1875	・オックスフォード、セント・ジョーンズ・カレッジで古典語を修めて卒業。
1875-1910	・勅任視学官となる。しかし、精神的停滞が続く。1875年からヨーク州、1879年からケント州、1897年からオックスフォード州で勤務する。サイキズムの著作に出会ったのは、ケント州時代である。オックスフォード州時代以後、精神の再生と等価と捉えられた内的生活が始まる。1903年、Divisional Inspectorとしてノーサンバランド州に着任。
1905	・初歩学校 (elementary school) 主任勅任視学官となり、「出来高払い制 (Payment by Results)」の教育を批判する。 ・『哲学とは何か (What is Philosophy)』を刊行。 ・『キリストの信条 (The Creed of Christ)』を刊行。
1907	・サセックス州のサンプティングの学校において劇化学習法 (systematised, organised play) という独創的な実践をしていた女性校長 (Harriet Finlay Johnson, = 'Egeria') に会う。その実践を彼は「黙示 (revelation)」と称して捉えている。
1908	・アルファ・ユニオン (Alpha Union, 1908-) のメンバーとなる。 ・『ブッダの信条 (Creed of Buddha)』を刊行する。(普遍的魂をもった個人の理想的アイデンティティにおける信条は、ブッダの実践的な教えにあり、それは潜在的源泉であると確信する。)
1910 (Jan.)	・主任勅任視学官の体験に基づき、地方学校当局の視学官の資質の悪さを批判する。それは、「ホームズ・モラント回状、メモランダム21」のなかでであるが、それが教育院に騒動を巻き起こす ¹⁶ 。
1910 (Dec.)	・上記がきっかけとなり長年務めた初歩学校勅任視学官を辞任。
1911	・『教育の現状と可能性—一般の教育と特殊な初歩教育の研究— (What Is and What Might Be—A Study of Education in General and Elementary Education in Particular—)』を刊行する。その著作において、形式的でシステム化され、試験に乗じた教育システムを非難し、協同 (co-operation)・自己表現 (self-expression)・活動性 (activity) の諸方法を唱導する。
1912	・モンテッソーリシステムの報告 ("The Montessori System of Education" Pamphlet 24) を公式に教育院に提出する。
1914 (Jul.)	・連合王国モンテッソーリ協会の設立にともない、委員会の委員長に任命される。 ・大英帝国モンテッソーリ協会主催のモンテッソーリ会議 (7月) を開く (当日は手術のために欠席。それに先だつ6月に「教育の新理想 (New Ideals in Education)」を結成)。以後、「教育の新理想」の実質的主導者として年次会議を開催する。
1921 (Oct.) - 1922 (Jul.)	・Quest Societyの総裁をつとめる。
1922 (Oct.) - 1925 (Apr.)	・Quest Societyの副総裁をつとめる。
1925 (Mar.)	・「教育の新理想」の季刊雑誌『新理想』(— 2 / 1934) の刊行に、尽力する。
1925 (Sep.)	・「教育の新理想委員会」の設立に伴い、執行委員となる。
1926 - 1931	・「教育の新理想委員会」の第六代議長となる。
1929	・新教育連盟 (New Education Fellowship) イギリス・セクションの執行委員となる。
1931	・「教育の新理想」年次会議の会計監査となる。
1936 (14 Oct.)	・没す。

< John Stuart Mackenzie (1860-1935) の略歴 >

(資料 2¹⁷)

年 (日, 月)	事 項
1860 (29 Feb.)	・グラスゴーのスプリンバーン (Springburn) で衣料貿易商の家庭に誕生する。
1868	・家族と共に南アフリカへ移住した直後に父母が死亡したため、スコットランドの親戚にひきとられて育つ。
?	・グラスゴー大学にて優秀な成績を修める。
1884-1889	・エジンバラ大学にてショウ特別研究員 (Shaw fellowship) を獲得する。 ・グラスゴー時代の主任道徳哲学教授のケアード (Edward Caird) に社会哲学の研究を求められていたことを自覚的に受け止め、その研究に専念する。
1886	・ショウ講義において、「社会哲学序論」の構造を確立する。
1889	・特待生として、ケンブリッジ、トリニティ・カレッジへ入学。 ・J. M. E. Taggartと友情を育む。
1890	・ケンブリッジ優等試験学位を取得する。 ・『社会哲学序論 (An Introduction to Social Philosophy)』を刊行。
1893	・『倫理学必携 (A Manual of Ethics)』(邦訳: 野口援太郎訳『倫理学精義』富山房, 1901年, 米澤武平・田中達訳『倫理学提要』光風館, 明治34年) を刊行。
1894	・カーディフ大学の哲学科教授に就任。
1898	・ブリストルの Walter William Hughes の長女 Hettie Millicent と結婚。
1902	・『形而上学概説 (Outlines of Metaphysics)』を刊行。
1907	・『ヒューマニズム (Lectures on Humanism)』(邦訳: 渡邊勇助訳『ヒューマニズム (人本主義) に就いて』内観書

1909	房, 昭和4年)を刊行。 ・妻ミリセントの著作『ヘーゲルの教育理論と教育実践(Hegel's Educational Theory and Practice)』に序文を寄稿する。
1911	・グラスゴー大学より名誉法学博士号を授与。
1915	・カーディフ大学を退職。
1916	・第三回「教育の新理想」年次会議にて「宗教教育の倫理的側面(The Ethical Aspect of Religious Education)」 ¹⁸ のタイトルのもと講演する。
1917	・『構成的哲学の要素(Elements of Constructive Philosophy)』を刊行。
1918	・『社会哲学概説(Outlines of Social Philosophy)』を刊行。
1920	・『欲望の矢(Arrors of Desire)』を刊行。
1921	・「魂の探究(In Quest of the Soul)」 ¹⁹ (in <i>The Quest</i> , Vol.8, No.1)を執筆。
1922 (Apr.)	・「三重の精神状態(The Three-fold State)」 ²⁰ (in <i>The Hibbert Journal</i> , Vol.20, No.3)をシュタイナー(Dr. R. Steiner)の同誌1921年7月号の投稿文を受けて執筆。
1923 (Jan.)	・「創造観(The Idea of Creation)」 ²¹ (in <i>The Hibbert Journal</i> , Vol.21, No.2)を執筆。
1924 (Oct.)	・「時代と永遠世界(Time and Eternity)」 ²² (in <i>The Hibbert Journal</i> , Vol.23, No.1)を執筆。これは「創造観(The Idea of Creation)」の続論として位置づけられている。
1926 (Jan.)	・「愛, 智慧, 創造的力としての神(God as Love, Wisdom, and Creative Power)」 ²³ (in <i>The Hibbert Journal</i> , Vol.24, No.2)執筆。
1928	・『生の根本的問題(Fundamental Problems of Life)』を刊行。
1931	・『宇宙進化論の諸問題(Cosmic Problems)』を刊行。
1934	・英国アカデミーの特別会員に選出される。
1935 (6 Dec.)	・チェプスタ(Chepstow)近郊にて没す。

< Hettie Millicent Mackenzie (1863 - 1942) の略歴 >

(資料3)

年(日, 月)	事 項
1863.6.11	・クリフトン(Clifton)のヨーク・プレイス(York Place)の地でヒューズ(Walter William Hughes)の長女として生まれる。
1870	・7歳の時に母親が死亡。
1877	・父再婚の直前14歳誕生日のころ, スイス(at Montmirail, near Neuchâtel)のモラヴィア系の学校へ入学。
1879	・ブリストルのユニバーシティ・カレッジの学生になる。 ・トウィンビー・ホール(Toynbee Hall)やブリストル労働者学校などの活動に参加する。そこで社会的セツルメントが望ましいとは思いつつも労働者の子どもを考慮に入れた活動の必要性を自覚し, ケンブリッジのトレーニング・カレッジのヒューズ(Miss E. P. Hughes)の助言を受けるようになる。エドワード・カーペンターの <i>Towards Democracy</i> の著作から大きな影響を受ける。
1888 (秋)	・ケンブリッジのトレーニング・カレッジの学生になる。ケンブリッジ教員資格取得試験に合格。その後, シェフィールドの高等学校で2年間教師をするが, その実際的な価値に疑問を持つようになる。
1891 (秋)	・カーディフの初等学校女性教員トレーニング・カレッジの講師(Normal Mistress)になる。
1898	・ユニバーシティ・カレッジの哲学科長を務めていた哲学者マッケンジー(John Stuart Mackenzie, 1860-1935)と結婚。
1904.6.1	・トレーニング・カレッジの拡大にともない助教授に昇進。
1909	・大学理事会(Senate of the College)に指名され大学評議委員会の委員を任命される。 ・夫のヘーゲル紹介文付きで『ヘーゲルの教育理論と教育実践(Hegel's Educational Theory and Practice)』を刊行。
1910	・教授職に就く。
1915	・夫の体調を考慮し, 夫と共に教授職を退く。
1916.8	・第三回「教育の新理想」年次会議(Aug. 14-21)に出席する。教育の新理想の常任委員(General Committee)を務める。
1917	・第四回「教育の新理想」年次会議(Jul. 26-Aug. 5)に夫婦で出席する。ミリセントは「教育の新理想」の常任委員(General Committee)を務める。
1918	・第四回「教育の新理想」年次会議(Aug. 14-21)に出席する。教育の新理想の常任委員(General Committee)を務める。1918年, 1919年, 1921年も委員を務めている。 ・国立サーヴィス機関としての教育機関(Guild of Education as National Service)をロンドンに設立する活動に協力し, 名誉機関長となる。委員の一人に Mrs. Reginald Halsey がいたため, そこは後にホールゼイ(Halsey)・トレーニング・カレッジ(-1922)と改称され, 教育院の認可を得る。 ・マンズフィールド・ハウスセツルメント(Mansfield House Settlement)の地方支部がケントン(Kenton, in Middlesex)に出来たため, その地へ夫婦で転居する。ホールゼイ・トレーニング・カレッジの附属施設として, 工場労働者のための継続学校(an experimental Day Continuation School)がマンズフィールド・ハウスで開設され, その全課程の名誉課程長となる。また, オックスフォード, ケンブリッジ, ロンドンのカレッジやロンドンの中央講演室(the Central Lecture Rooms, Tavistock Square)で再々, 教育学の講義をする。

1920.11	・夫婦で、マドラスから始まってインドに講演旅行をする。
1922	・「教育の新理想」年次会議 (Apr. 17-24) に出席し、シュタイナーの理論に共鳴する。
1922.10	・再び夫婦でインドへ講演旅行をする。アグラ (Agra) で教育学を学ぶ女子学生との討論に刺激を受ける。タゴールの学校を訪問し、ラーダクリシュナ (Radhakrishnan) に会う。
1923.4.25	・コロンビア大学の Dr. Felix Adler の招聘により、夫の講演のために渡米する。ジョージ少年共和国 (George Junior Republic) を訪問し、ジョージ氏と少年のセツルメントに不可欠な自由と自治について討議する。カリフォルニア、パークレイ校にて夫妻で講演する。彼女は、成人課程の女子学生を対象とする二つのコースで「教育の歴史」と「近年の教育実験」について講義する。その他、多数の都市の大学を訪問して講演する。
1924	・ヒューズへの献辞をつけて、『教育における自由 (Freedom in Education)』を著す。
1925	・「教育の新理想」年次会議 (Apr. 14-20) に出席し、「協同的自由 (Co-operative Freedom)」 ²⁵ の演題で講演する。
1927	・ロンドンに移転。1927年から1931年までの間、心霊研究の発展のために活動する。
1935.12.6	・夫スチュアート没す。
1936	・夫の『自伝』を編集して出版。
1942	・没す。



JOHN STUART AND MILLICENT MACKENZIE IN 1928

JOHN STUART AND MILLICENT MACKENZIE IN 1928
(出典：John Stuart Mackenzie Edited by His Wife, 1936)

以上、彼らの接点を探すかたちで略歴を纏めたが、これらの略歴から顕在化してくるのは、彼らがマージナル・マンであったということである。国教会、パブリックスクール、オックスブリッジの人々、すなわち「エスタブリッシュメント」が政治や社会の中心を占めるイギリスにおいて、彼らは教養をもった近代人ではあるが、その出自からしてマージナル・マンにならざるを得なかったという事情がある。それゆえ、彼らは絶えずアイデンティティを確かめながら生きてゆかざるを得なかったといえよう。そのため、彼らには何らかの精神的基盤が必要であった。このことはホームズの著作が宗教に傾いていたこと（資料1、資料5）、また J.S. マッケンジーの著作も、哲学や倫理学から神秘的な印象を与えるものに傾いていたこと（資料2）に示されている。それを支えていたものが、マッケンジー夫妻とホームズに共通する心的傾向であり、それは東洋思想である。インド思想への傾倒は、当時のイギリスでは希有なことではないが、しかし、その基本はウパニシャドの枠組みで捉えられるため、キリスト神学ではなく神秘思想に属する知識であらゆる事象が説明される。また、それだけでなく、それはキリスト教批判および近代合理主義批判を掲げ、同時に内なる神を肯定する内神論を保持している。ホームズの

に言うならば²⁶、そのような思想にシフトする彼らの思考には、デカルト理論に基づいた自然科学中心の形式主義社会への批判と、国教会中心の社会への批判ならびに原罪観批判があるのである。そして、さらに特徴的なのは、このような諸批判が、存在物の実在するコスモス観へと進んでいくことである。それゆえ、彼らは「自然」「人間性」「人間精神」を捉え直すことを第一義とせざるを得なかった、と解することができる。

このような彼らの思想は、今日のイギリスでは異端の枠組みで括られ、彼らの真意は等閑視されてきたわけであるが、軽視し難いのは、彼らが極めて真摯に宗教の問題に関心を向け、ユニテリアンの機関誌 *The Hibbert Journal* (1902-) に1910年代の終わりから1920年代にかけて投稿している点である。ここに投稿することによって二人が意図したのは、西欧中心主義の思考法への批判であり、世界に多く存在する諸宗教を一つの方向へ、すなわち平等と平和というカテゴリーの方向へと収斂し、統合させようとする姿勢の表明を意味したのである。それはこの雑誌の原理（資料4）、すなわち、「①思想の目標は一つである、②思想は目標に到達しようとして永久に運動しなければならぬ、③その動きは多くのものが一つに近づいていくことにより、意見の対立のなかで促進される」という三つの原理が、究極的に彼らの生き方の基盤をなしていたことを意味する。

この点を踏まえるならば、次に浮上してくるのは、なぜマッケンジーが新教育を求める運動に共鳴し、参画したのかという問いである。社会哲学者として、またケアードの高弟として認められながらも、突如、哲学の領域では彼のその名は話題に上らなくなってくる。倫理学者の彼を突き動かしたのは、また彼が東洋的な神秘思想に歩を進めたのは、いかなる意識ゆえだったのだろうか。以下では、そのことを探究するために彼の言説に目を向けて考察することにしたい。

4. J.S. マッケンジーの根本的問い

—精神をどのように捉えるか—

(1) J.S. マッケンジーの視座

—哲学及び倫理学の社会的・宗教的な意味—

社会哲学及び倫理学の権威と評されていた J.S. マッケンジーは、既に述べたように、新ヘーゲリアンとしての位置を確固たるものとしながらも、形而上学研究の末に別の道に進むようになる。彼のような人物は教育実践者がそのほとんどを占めている新教育運動のなかでは着目に値する。しかし同時に、社会哲学及び倫理学の領域では、彼は異端視の色彩を強く受けて評されるようになる。というのも、マッケンジーは、「出発点は社会哲学であったが、物的事象の意識内的存在を主張し、ポーザンケトに近く、倫理学者としてカント的形式主義に反対していた」哲学者として囑望されていたからである²⁷。つまり、そもそも彼はグリーン (T. H. Green, 1836-1882) らイギリス新理想主義運動の系統に位置しつつ、しかし、新ヘーゲリアンのグリーンを批判したのである。マッケンジーにとってグリーンという自己実現は、「倫理の根底としては余りに主観的」であり、「善美なる生活は実際、美しい事物を創造し、保存する努力に存するものである」からである。だが、その際にも、ケアード²⁸の弟子たる姿勢は崩さなかった。ところが、そのような彼の考えは、『哲学の建設的要素 (Elements of Constructive Philosophy)』の出版 (1917) 以来変わったと評されている²⁹。そこでは、彼は明らかにダグラス・ファウセット (Douglas Fawcett) の神的想像力 (Divine imagining) の説に感化されているからである。そのため、彼の哲学は、神的生命を全体・コスモスの根源とみる点に特徴があり、その全体にかかわって、神の愛、神の仁愛、神の知識あるいは洞察、さらには神の力あるいは想像力は、彼にとって重大な方面の理論なのである。

しかし、そもそも彼は「教育の新理想」運動に参画する以前の『ヒューマニズム』(1907) を講じたときから³⁰、自然主義の科学的世界観に疑念をもっていた。彼に従えば、当時の自然主義は、エネルギーの能率性というデカルト的因果律で客観界 (Universe) を説明するものとして機能する理論であり、それは自然と人間を対極的に捉える立場であった。彼はこの点に疑念を呈する。彼の考えでは、客観界の实在の創造主は不可知であり、それゆえ、重要なのは、秩序態としてのコスモスを組織的・統一体として取り扱うことであり、またそれゆえ、制限された一つの現象の研究結果としての科学を整理することが必要なのである。そして、実際にその考えは、『哲学の構成的要素』の刊行に至って先鋭化されている。というのも、彼はそのなかで、科学的成果を全体に還元するのではなく、まず、様々な科学によって使用されている根

本的概念を批判的に吟味し、相互の関係を調べ、全体としての宇宙の实在に関して包括的な見解を得る必要があると主張するからである。

このような彼の自然主義批判の背景には、ホームズが強調した〈多即一 (All is One) 〉と同様の多元的・秩序的コスモス論が (資料 4・5 参照)、すなわち、自然と宇宙は全体として秩序正しい組織体であるという考えがある。これは秩序的ホーリズムと捉えることができるが、その考えはまた、全体論的理想主義と名づけて捉えることができよう。しかも、彼は『ヒューマニズム』の最後において、「我々の理解し得る世界というのはどのような世界なのであろうか」というバルフォア氏の問いを取りあげ³¹、それは、「人間性がその英知と霊的な材をますます多く蓄積するにつれて、我々が自由に動き回ることができる世界、即ち、ますます賢明に動き得る世界である」と結んでいるのである³²。

したがって、これらの言説から導き出される視座は、「人間の意識の流れ」や意識の変化・発展を解明しようとするサイキズムのそれと同様の視座であり、この視座に立つ J.S. マッケンジーは、意識をもつ「人間生活」の概念そのものに光を当て、誕生 (始まり) と死 (終わり) の間の生のダイナミックな活動を視野に入れて注視しつつ、宗教教育における学校の果たす役割や教育システムの社会的意味に対して多大な期待を寄せるのである。

では、それは改革思想としていかなる意味を持ち、いかなるベクトルを有していたのであろうか。次に、そのことを考察することにした。

(2) J.S. マッケンジーの「新理想」の意味とベクトル

—社会・宗教・教育の諸課題の融合—

J.S. マッケンジーは、妻の著作『ヘーゲルの教育理論と教育実践』(1909) の長い序文において、ヘーゲルとプラトンの思想にある「対話」の意味を高く評価しつつ、次のような考えを主張している。個人が原初的な関心を発達させながらも、自らを見失うことなく自らの精神 (mind) を持ち続けることが、人類の発展につながるものであり、そのことは世界が発展していくという思想の運動を跡づけるなかで、個人が自分自身のなかに有しているものを拓いていく過程をもたらしたときに信じられることになる³³。つまり、彼は世界観の進展・進歩を前提に、また、個人の内面世界に何らかの種子があることを前提に、個人がどこかへ向かうことが成長であると捉えるのである。いうまでもなく、その行き着くところは創造主たる何者かの側である。しかも、彼はこの道こそが教育の意味であると主張するのである。なぜなら、彼はこうした考えを、過剰な重圧を与えてきたスペンサーの教育論を批判した後で、「プラトンのようにヘーゲルは、全ての教育は人生のためにあるということを極めて強く

信じているが、私は、彼ら二人の考えに付け加えて、現代精神 (mind) があまり快く認めようとしないうえ、つまり、全ての生活は教育のために存在すると私は考える³⁴とまで言明しているからである。このことはマッケンジーの教育観を端的に示している。すなわち、教育は人生のためであると同時に、人間が生きるということは教育の営為そのものなのであるという教育観である。敷衍するならば、教育という営為の内実を伴ってはじめて人間は生きている、と言い得るのである。それゆえ、子どもを持たない彼にとって生きることを「後世の者の育成」と規定するのは、普遍的なる神の仕事に接近することを意味していたのである。

しかし、彼は「宗教教育とは神学の研究を意味しない」と主張し、また、「宗教なくして善き市民にはなれないのである」とも述べている³⁵。しかも、自由・平等・平和への献身だけでは完全な宗教とはいえないのであり、また、市民を育成するだけでは教育の完成とはいえないのである。そこで、彼は地上に完全なる善をもたらすことを主張する。彼は、それがたとえ困難であろうとも、「プラトンが善の概念と呼んだものを実現しようとする試み、あるいは『汝の意思は天におけると同様に地上で為されるであろう』という希みを実現しようとする試み、あるいは、ブレイクの言葉『英国の緑あふれる快適な地にエルサレムを築く』試み」を強調する³⁶。だが、この徹底した宗教教育への願望は、宗派から抜けきれないでいるイギリスの世俗社会への批判でもあった。そして、この批判は1920年代に入るとより鮮明になる。彼は当時着目されていたかのベルグソン (H. Bergson, 1859-1941) の創造的進化やエランビタール (élan vital) の考えだけでなく、「シュタイナー (Dr. Steiner) やダグラス・フォーセット (Mr. Douglas Fawcett) などのようなオカルト研究や、東洋的思索 (oriental speculation)」への着目を強め³⁷、教育の営為が対象とする人間の「内なる意識」「魂」に焦点を当てるようになる。そして、最終的にはホームズ同様に、客観界に存在する多くの宗教の「纏れ (entanglement)」の調停を志向するのである。

したがって、マッケンジーが教育改革の運動に関与したのは、哲学者・倫理学者という枠を超えて探究せざるを得ない人間存在の必然性のゆえであり、それは実在する人間の生きる意味が教育の営為そのものに存在するからなのである。そして、すなわち、それは「善なるアイデアで充ちた秩序あるコスモスの建設」という信念に裏付けられていたのである。

5. おわりに

—新教育運動の準拠枠としての宗教的自由—

ところで、イギリス理想主義の新教育への影響は、近

代的概念に属する「自己」を中核にした教育概念の創出をもたらした。たとえば、ホームズが自己実現への過程を、自己忘却、自己開示、自己表現というフレーズで説明したように³⁷、近代的自己を再確認した上で新教育理論の構築が志向されていた。また、「教育の新理想」のメンバーらは、モンテッソーリ法の中核に位置する自動教育 (auto-education) を称揚し、後に、その方法を自己教育 (self-education) と読み替え、さらには、自己統制 (self-controll)、自治 (self-government) などの概念を生み出していった。しかし、その背景に非国教徒の拠り所となったグリーン理想主義だけでなく、今日では異端視されるような東洋の神秘思想への憧憬の態度があったこと、この点をいかに捉えるかが留意されねばならない。その意味で、新教育運動は西欧近代が強固に有していた二元論の価値観へのアンチ・テーゼを契機としていた点を顧慮して解されねばならず、それゆえ、イギリス新教育で語られる「自己」概念には、近代概念としての「自己」に加えて東洋思想的な「自己」という隠喩が内包されていた点を重視すべきであろう。つまり、それは新教育運動家の称揚する「自己」に、スピリチュアルな自己が暗黙の前提としてあった、ということの意味する。

ここに顕在化するのは、「合理」に依拠した科学、また、没価値の枠組みを堅持する科学の成果を直截的に教育の概念に還元しないという見解であり、二元論的な善悪概念に帰着させない哲学的準拠枠である。それはたとえば、行動主義心理学の批判や、その後のイレブンプラス試験への批判を生み出していく。ただ、そもそも改革とは何らかの価値を含み込んだ教育理想へと向かうベクトルを有しているものであり、それゆえ、公教育による内面世界への介入に禁欲的にならばなるほど、つまり、「教育の自由」を標榜すればするほど、教育という営為が本来的にもっているパラドックスが顕在化するというジレンマが生じることになる。換言するならば、精神の自由、宗教の自由というカテゴリーを、教育の自由において適応するならば、たちまち教育という営みはその存在根拠を失う。そして、教育は自由ではなくなり、新たな概念装置を措定せざるを得なくなり、またそして、逆説的に自由は不自由へと転落する。ここに教育の営為が本来的に有している価値をめぐる循環性が立ち現れる。それゆえ、J.S. マッケンジーがめざした個人の生・生涯の支柱となる神一般への接近という仕事、それはキリスト教神にのみ依拠するのではなく、また、キリスト教に支えられた西洋的思考でもないのである。つまり、ホームズ同様に、彼の場合も、「新理想」や新教育の自由の意味内容は、巨視的なコスモロジーの枠組みをもって措定されていたのである。また、その枠組みは教育の自由を語る際の、いわば回路を形成するのであり、コスモスに位置する人間への教育において不可欠な宗教的自由という枠組みだったのである。

学校教育の理念の探究において自己の形成・発達をいかに捉えるかは、社会的・宗教的コンテクストへの位置づけを不可欠とし、彼らにとって、‘animal educabile’であり‘animal educandum’でもある人間への教育は、自己(内なる自然)と他者(外なる自然)との関係性に左右されるものであった。そして、それは子ども観の問題でもあった。イギリスでは、近代教育制度が成立していく過程においてさえ、キリスト教の原罪観とロック的なタブラサ(tabula rasa)の考えが混在し、人間をいかに捉えるかについては不問に付されていたのであった。それが表面化するの、先述したように、教員養成がボランティア

なものから公的なものに委ねられ、訓練された教師が子どもとかかわった際に見いだしたリアルな報告からであった。それが、子どもの関心や活動性に着目した教育の有効性が明らかにされ始めた最初の時期、すなわち教育の新理想運動の始まりの時期なのである。その意味において、哲学者 J.S. マッケンジーの存在は大きな位置を占めていたのであり、その関心が西洋近代批判と神秘思想を折衷したところにあるにせよ、今後はこの点を踏まえ、さらに宗教と教育の枠組みを交差させて精緻に捉える必要があろう。なぜなら、公教育の公共性は、この点への接近なくして存立し得ないと思われるからである³⁸。

< The Hibbert Journal の目的 >

(資料 4³⁹)

1. 多様な宗教的「意見」すべてにおいて、宗教的な「願い」が目指すものはひとつである。このことは容認されるであろう。人々の思想には、知性の違いの程度により、それぞれの水準で最初は異なるけれども、人間の水準を超越した思想によって喚起される共通の「目的」があり、必然的にそれらはこの共通目的に収斂していく。あたかも焦点に向かうように。このようにして我々は最終的な検討において、敬虔な精神に対して内面的な統一性を与える原理に到達する。雑誌 *Hibbert Journal* は、この内面的な統一性を解明しようと努める所存である。
2. 宗教的思想のあらゆる在り様が既に人間の言語において示されているという根拠に基づいて、探究を嫌う人々と、自然界の進化に似た過程を神学の中に見いだす人々が存在するけれども、本誌は後者の人々に対して、率直に共感する。我々は「進歩を遂げた」思想を特に好むものではない。けれども、進歩しつつある思想、それを伝えることが我々の使命である。本誌の運営方法において、知性的な法則に従った動向が宗教における健全さと活動の印になるであろうことが含意されている。同時に我々は過去への回帰であれ、新しいものへの出発であれ、そのような動向が進むべき方向を決めることに対して、警戒の念を抱いている。我々の目標は、その問題に対する予断を慎重に回避して、より強固な基盤に向かっての絶え間のない接近により、宗教思想の動向を反映することではなければならない。
3. 前述のような思想の動向は、自らの内部に対する言動の衝突によって促進される。我々はこの原理を受け入れて、本雑誌をして反対意見の衝突を公開せしめようと思う。一致した見解のみを選ぼうとする試みは、本誌においては決してなされない。むしろ論争は歓迎されるであろうし、対立する者同士の遭遇が、真理の火花を点火させるのだということが、我々の信念なのである。我々は意見の対立が感情的なものから生じるという危険を十分承知している。だが、これらは対立そのものの必然的な部分ではないのであり、本誌のようにそれを回避できるのならば、論争が生み出すものは暗黒ではなく、光明なのである。我々は三つの真理を表明している。すなわち、思想の「目標」は一つであること、思想は「目標」に到達しようとして永久に運動しなければならないこと、その動きは多くのものが一つに近づいて行くことにより、意見の対立の中で促進されること、である。これら三つの原理は明らかに同等であり、これらは「宗教、神学、哲学の評論」としての本誌の精神を表すものである。

< ホームズの著作リスト >

(資料 5⁴⁰)

<Autobiography>

1920 In Quest of an Ideal, R. Cobden-Sanderson.

1922 The Confessions and Hopes of an ex-Inspector of Schools, in *The Hibbert Journal*, 20 (July), pp.721-739.

<Education>

1879 Report of the Committee of Council on Education, General Report for the year 1878 on Schools inspected in the West Riding of Yorkshir, pp.591-604.

1883 Report of the Committee of Council on Education, General Report for the year 1882 on Schools inspected in the Ashford District (Counties of Kent and Sussex), pp.351-64.

1898 An Address to the Teachers of the Oxford district, Given at Oxford, at banbury and at wantage (n. p. Oxford).

1908 A Village School, A Paper read at a meeting of an education club, Lyceum Press, Liverpool.

1911 What Is and What might Be, a study of education in general and elementary education in particular, Constable.

1912 The Montessori System, Board of Education, Education Pamphlet No.24. (H.M.S.O.).

1912 Socialism and Education, Address to the Cambridge University Fabian Society, Reprinted in *Freedom and Growth* (1923).

1913 Introduction to *A Montessori Mother* by Drothy Canfield Fisher, Constable.

1913 The Tragedy of Education, Constable, new edition 1921.

1913 The Tragedy of Education, in *The Quest*, 4 (January), pp.212-28.

1914 In Defence of What Might Be, Constable.

1915 Ideals of Life and Education-German and English, in *Nineteenth Century and After*, 78 (October), pp.957-71.

1916 The Nemesis of Docility: a study of German character, Constable.

1916 Discipline and Freedom, in *Nineteenth Century and After*, 80(July), pp.88-100.

1917 The Problem of the Soul: A Tract for Teachers, Constable.

1917 Drudgery and Education, A Defence of Montessori Ideals, in *The Hibbert Journal*, 15 (April), pp.419-33.

1917 The Real Basis of Democracy, in *Nineteenth Century and After*, 82 (August), pp.301-25.

1918 The Relation of the School to the Home in "EGERIA'S" Village, *Report of the Conference on New Ideals in Education held at*

- Oxford, from August 12 to 19, 1918, pp.17-21.
- 1920 The Psychology of Sanity, in *The Hibber Journal*, No.18 (April), pp.509-18.
- 1921 Give me the Young, Constable.
- 1921 The Recreations of the Spitalfield Weavers', in *Conference on New Ideals in Education Report*, Reprinted in *Freedom and Growth* (1923).
- 1923 Freedom and Growth and other essays (Dent).
- 1924 Can Education Give Us Peace?, Dalton Association.
- 1925 Sanderson of Oundle, in *New Ideals Quarterly*, March, Vol.1. No.1, pp.8-10.
- 1925 The Meaning for Self Realization, in *New Ideals Quarterly*, Sept., Vol.1, No.3, pp.5-17.
- 1929 The One Thing Needful, in *New Ideals Quarterly*, Oct., Vol.3, No.11, pp.383-392.
- 1930 The Old Regime, Apr., in *New Ideals Quarterly*, Vol.4. No.11, pp.1-16.
- <Philosophy>**
- 1898 Sursum Corda: A Defence of Idealism by EGHA (Macmillan).
- 1905 What is Philosophy? (John Lane, The Bodley Head).
- 1914 'Professor Eucken and the Philosophy of Self-Realisation' *The Quest*, 5 (April), pp.401-19. Reprinted in *Freedom and Growth* (1923).
- 1919 The Secret of Happiness (Constable).
- 1919 'Freedom and Growth', in *The Hibbert Journal*, 17 (July), pp.626-41.
- 1920 'The Philosophy of my Old Age', in *The Quest*, 11 (January), pp.167-78.
- 1921 'The Spirit of the Quest', in *The Quest*, 12 (July), pp.435-52.
- 1922 'What Joy does for the Young', in *Nineteenth Century and After*, 92 (September), pp.389-96.
- 1927 Self-Realisation: The End, the Aim and the Way of Life (Constable).
- 1928 Experience of Reality. A Story of Mysticism (R. Cobden-Sanderson).
- 1928 'Phylosophy without Metaphysics', in *The Hibbert Journal*, 27 (October), pp.15-34.
- 1929 'A Criticism of the New Realism as Expounded by Professor S. A. Alexander', in *The Hibbert Journal*, 28 (October), pp.48-68.
- 1929 The World of Self or Spirit. A Scheme of Life (R. Cobden-Sanderson).
- 1930 Philosophy Without Metaphysics (Allen and Unwin).
- 1931 'Wanted-A New Logic', in *The Hibbert Journal*, 29 (January), pp.252-69.
- 1932 'The Headquarters of Reality', in *The Hibbert Journal*, 31 (October), pp.129-40.
- 1933 The Headquarters of Reality. A Challenge to Western Thought (Methuen).
- 1934 The Great Passing On (Rider).
- <Poetry>**
- 1876 Poems (Henry S. King).
- 1879 Poems 2nd series (C. Kegan Paul).
- 1899 The Silence of Love (John Lane).
- 1900 What is Poetry? (John Lane).
- 1902 Walt Whitman's Poetry. A Study and a Selection (John Lane).
- 1903 The Triumph of Love (John Lane).
- 1912 The Creed of My Heart and other Poems (Constable).
- 1918 Sonnets to the Universe (A. L. Humphreys).
- 1920 Sonnets and Poems...selected and arranged by T. J. Cobden-Sanderson (R. Cobden Sanderson), Reissued 1936.
- <Religion>**
- 1895 A Confession of Faith, by an Unorthodox Believer (Macmillan).
- 1905 The Creed of Christ (John Lane, The Bodley Head).
- 1908 The Creed of Buddha (John Lane, The Bodley Head).
- 1919 The Secret of Happiness; or, Salvation through Growth, Lond.
- 1919 The Secret of the Cross. A Plea for a Re-Presentation of Christianity (Constable).
- 1919 'Religion As the Basis of Social Reconstruction', *Nineteenth Century and After*, 86 (November), pp.920-9.
- 1919 'The Religious Training of the Young', A Paper read at Manchester, Nov. Reprinted in *Freedom and Growth* (1923).
- 1920 The Cosmic Commonwealth (Constable).
- 1921 'Does Contemporary Scholarship do Justice to the Teaching of Jesus?', in *Nineteenth Century and After*, 90 (July), 52-63.
- 1921 All is One: A Plea for the Higher Pantheism (R. Cobden-Sanderson)
- 1923 'The Idea of Evolution and the Idea of God', in *The Hibbert Journal*, 21 (January), pp.227-47.
- 1924 'Spiritual Evolution as a Gospel of Salvation and a Principle of Conduct', in *The Hibbert Journal*, 23, Part 1. (October), pp.311-26.
- 1924 Dying Lights and Dawning. The Martha Upton Lectures, given in Manchester College, Oxford, 1923. (Dent).
- 1924 Introduction to The Philosophy of the Upanishads by S. Radhakrishnan. (Allen and Unwin).
- 1924 'Our Debt to the Ancient Wisdom of India' Part 1, in *The Hibbert Journal*, Vol23, (October), pp.72-84.
- 1925 'Our Debt to the Ancient Wisdom of India' Part 2, Vol.24, (January), pp.207-217.
- 1925 The Albigenian or Catharist Heresy. A Story and a Study (Williams and Norgate).
- 1926 'Tyrrell on "The Church"', in *The Hibbert Journal*, 24 (January), pp.322-63.
- 1926 'Two or One? A Defence of the Higher Pantheism', in *The Hibbert Journal*, 24 (January), pp.404-20.
- 1927 'A Last Guess at Truth', in *The Hibbert Journal*, 25 (January), pp.490-507.
- 1928 'The Mystic as Explorer', in *The Hibbert Journal*, 26 (April), pp.427-44.
- 1930 'The Practicality of Buddhism and the Upanishads', *The Aryan Path*, Vol.28 No.1 (September), pp.549-54.
- 1931 'Two Conceptions of God. Without or Within', *The Aryan Path*, 2, Part 1 (July), pp.452-459. Part 2 (August), pp.528-533.
- 1932 'Life in the Next World', in *The Hibbert Journal*, 30 (April), pp.431-449.

(注)

1. イギリス新教育については、拙著『ニール「新教育」思想の研究—社会批判に基づく「自由学校」の地平—』（大空社、1998年）、「新教育連盟に関する覚書」（『教育新世界』第45号、世界教育連盟日本支部、1999年6月、38-57頁）を参照されたい。
2. 本論は、日本イギリス哲学会第24回研究大会（年月：2000. 3. 25-26.、於：関西学院大学）において筆者がおこなったシンポジウムⅠ：「イギリス思想と大学改革」第三報告（タイトル：イギリス「新教育」運動における改革思想の諸相—マッケンジーはなぜ教育改革にコミットしたのか）のレジュメを加筆修正したものである。
3. この点については、イギリス史研究者の村岡健次氏が比較教育社会史研究大会の基調報告（日：2003年4月5日、於：同志社大学）で述べているが、筆者も同様の見解をもっている。
4. R. オルドリッチ、松塚俊三・安原義仁監訳、『イギリスの教育』（玉川大学出版部、2001）参照。
5. この組織は、1914年のモンテッソーリ会議を開催することを意図した大英帝国モンテッソーリ協会（The Montessori Society of the United Kingdom, 1912-）のメンバーらが、教育に関心のある人々をより多く結集させようとして、「別の呼称の使用」と「非形式的なかたちの採用」の2点を念頭において大会委員会を作ったことに始まる。本組織は、揺籃期（-1914）、興隆期（1915-17）、そして発展期（1918-22）へと至るが、その発展期の年次会議への参加者が、500人程度にまで達した現象に啓発された年次会議委員のB. エンソアが、新教育連盟（New Education Fellowship, 1921-）を結成して新教育運動の国際的連携を図ったため、低迷期（1925-29）、衰退期（1930-39）をむかえ、1928年4月には、新教育連盟イギリス支部として新教育連盟の傘下におさめられることとなる。「教育の新理想」と新教育連盟（New Education Fellowship, 1921-）の関係については、拙稿「「教育の新理想」と新教育連盟に関する考察—1920年代イギリス新教育運動の実態解明にむけて—」（教育史学会編『日本の教育史学』教育史学会紀要第41集、pp.192-212.）を参照。また、「教育の新理想」年次会議については、拙稿「イギリスにおける「教育の新理想」運動に関する研究（Ⅰ）—揺籃期・興隆期・発展期を中心に—」（鳴門教育大学編『鳴門教育大学研究紀要』第15巻、2000年、pp.181-195）拙稿「イギリスにおける「教育の新理想」運動に関する研究（Ⅱ）—低迷期・衰退期を中心に—」（鳴門教育大学編『鳴門教育大学研究紀要』第16巻、2001、pp.199-209）を参照。
6. ホームズの教育思想の特徴については、拙稿「E. ホームズの「教育の新理想」としての「自己実現」概念—<well-being>と<wholeness>の探究にもとづいて—」（教育哲学会編『教育哲学研究』第81号、pp.92-111）を参照。
7. M. マッケンジーについて既に筆者は、日本教育学会第60回大会（年月：2001年8月、於：横浜国立大学）において発表している。ここではその際の際の原稿や資料を一部用いた（学会発表題目：「教育の新理想」運動におけるM. マッケンジーの教育思想とその史的位置）。
8. 新生活連盟とは、スウェーデンボルグ（Swedenborg）の影響を受けた人々の系譜に位置づけることができるが、エマソン、オルコット大佐、心理学者のW. ジェームス、その彼の弟、ロバート・オーウェンの孫のオーウェンらのかかわる、アメリカを起点にしたイギリス、ドイツ、ローマ、パリ、ベルリンらに広がる共同体思想をもった連盟である。セシル・レディやエドワード・カーペンターはそのイギリス支部に属していた。彼らは、精神的なものに物質的なものを従属させることに基づき、「性格を完全性へと耕すこと」を目的にし、「経済においては社会主義者、理想においては共産主義者、政治においては平和無政府主義者」を自認していた。フェビアン主義、菜食主義、トルストイ主義、キリスト教社会主義など多様な人々がかかわり、ガーデン・シティ運動やセツルメント運動、大学拡張運動に参画していた。（W. H. G. Armytage, *Heavens Below-Utopian Experiments in England 1560-1960*, Routledge and Kegan Paul, 1961, pp.327-341.）
9. 視学官であったマシュー・アーノルド（Matthew Arnold, 1822-88）が当時の新教育運動家の支柱であったことは、よく知られているとおりである。また、彼は「出来高払い制」に対しても批判していた。マシュー・アーノルド著、小林虎五郎訳『再改訂法典—出来高払い制批判—』（東洋館出版社、2000）参照。
10. これまでのイギリス新教育運動研究では、両者は、とりわけミリセント・マッケンジーは、全く等閑視されてきた人物である。また、彼女の夫のJ.S. マッケンジーも教育学のカテゴリーで捉えられることはなかった。
11. この組織は、ブラバッキー夫人（H. P. Blavatsky, 1831-91）を始祖とし、その思想体系はバラモン教と仏教に基づく。全ての宗教に共通する真理・叡智は一つであるという信念から、「神々がもっている神聖な智慧」を科学的に解明し、永遠の真理に基づいた共通の倫理体系の下にあらゆる宗教・宗派・国民を調和させ、争いのない世界を建設しようとする。その意味において、神智学とユニテリアンの宗教的志向性は親和的である。また、二代目会長のアニー・ベサント（A.

- Besant, 1874-1933) は、フェビアン協会及び社会民主主義連盟のメンバーとして、1880年代のイギリス労働運動において先駆的役割を果たした。1888年、ショーの応援演説を受けてロンドン学校委員会の委員選挙に立候補した彼女は、最高得点で当選し、その後の3年間に渡って、無償の世俗教育、貧困児童の無料給食、公正な賃金の支給などの政策を掲げて精力的に活動していたが、ブラバッキ夫人との出会いを期に精神世界の道に進んでいった経緯がある。
12. W. H. G. Armytage, *Heavens Below-Utopian Experiments in England 1560-1960*, Routledge and Kegan Paul, 1961, pp.373-404.
13. Ibid.
 なお、マンスフィールド・ハウスの実態については、可能な限り調査したが、現時点では実証的史料は入手できていないため、注8に掲げた第二次文献に基づいた。
14. マッケンジー夫妻の「教育の新理想」年次会議への参画を実証する史料は、後に刊行されている年次会議録に依存せざるを得ないが、筆者が入手し得た1914年から1918年の会議録に従えば、妻のミリセント・マッケンジーは1915年より1918年の評議会の委員を引き受けており、彼女の夫マッケンジーの参加が実証されるのは、彼が演説を行った1916年だけである。
15. 資料1はホームズに関する筆者の先行研究に基づいて作成し、資料2と資料3については、主に夫の『自伝』(Edited by his wife & Foreword by Prof. J.H. Muirhead, *John Stuart Mackenzie*, pp.103-118. Williams & Norgate Ltd. 1936) と『カーディフ大学史』(Edited by S. B. Chrimes, Emeritus Professor of History, University College, Cardiff. *A Centenary History, 1883-1983*, University College, Cardiff, 1983) に基づいて作成した。また、「教育の新理想」会議についての実証性は、次の史料に求めた。*Report of the Conference on New Ideals in Education held at stratford-on-Avon August 14-21, 1915*, *Report of the Conference on New Ideals in Education held at Oxford from July 20 to August 5, 1916*, *Report of the Conference on New Ideals in Education held at Bedford College from August 14 to 21, 1917*, *Report of the Conference on New Ideals in Education held at Oxford, from August 12 to 19, 1918*, *Report of the Conference on New Ideals in Education held at Cambridge, from July 25 to August 1, 1919*, *Report of the Conference on New Ideals in Education 1921 & 1922*.
16. Peter Gordon, The Holmes-Morant Circular of 1911: A Note, in *Journal of Educational Administration and History*, University of Leeds, Vol.X, No.1, January 1978, pp.36-40.
17. なお、J.S. マッケンジーの著作活動の全体とその詳細については、未だ完全にその第一次史料の収集にいたっていないため、略歴の表では東洋思想への傾倒にかかわるものを記載することとした。それゆえ、ここでは可能な限りの第一次史料収集が課題として残されていることを指摘しておきたい。
18. J.S. Mackenzie, The Ethical Aspect of Religious Education, in *Report of the Conference on New Ideals in Education July 29 to August 5 1916*, pp.14-24.
19. J.S. Mackenzie, In Quest of the Soul in *The Quest*, Vol.8, No.1, pp.80-85.
20. J.S. Mackenzie, The Three-fold State in *The Hibbert Journal*, Vol.20, No.3, pp.472-486.
21. J.S. Mackenzie, The Idea of Creation in *The Hibbert Journal*, Vol.21, No.2, pp.209-226.
22. J.S. Mackenzie, Time and Eternity in *The Hibbert Journal*, Vol.23, No.1, pp.116-126.
23. J.S. Mackenzie, God as Love, Wisdom, and Creative Power in *The Hibbert Journal*, Vol.24, No.2, pp.197-214.
24. M. Mackenzie, *Co-operative Freedom*, in *New Ideals Quarterly*, March 1926, pp.10-19.
25. 拙稿「E. ホームズの「教育の新理想」としての「自己実現」概念— <well-being> と <wholeness> の探究にもとづいて— (教育哲学会編『教育哲学研究』第81号, pp.92-111.
26. 「マッケンジー」『哲学事典』平凡社, 1971, p.1330.
 なお、イギリスの哲学者ボーザンケトは、「イギリスのヘーゲル主義を代表するが、基本的な点でブラッドリーの立場に近く、批判的客観的観念論を説く」(同書, p.1305)
27. ケアード (Edward Caird, 1835-1908) は、新ヘーゲル学派に属し、グラスゴー大学、オックスフォード、ペリオル・カレッジに学び、グラスゴー大学道徳哲学教授 (1866)、ペリオル・カレッジの学長 (1893-1906) を務めた。グリーン、兄のジョン・ケアード、ブラッドリー、ボーザンケトらとともにイギリス新理想主義運動の一端を担った人物である。グリーンによるカントからヘーゲルへの通路の指示の帰結として、両者の調和を説いた。だが、本来の思惟動機は宗教哲学にあったため、宗教的意識を主客の対立を統一する意識として、またあらゆる意識の根本として捉え、このような超時空的無限者の有限者における実現を展開した。いわゆる人格的唯心論の立場から自然主義的進化論哲学を克服しようとした哲学者といえることができる。
28. ジェ・エス・マッケンジイ博士著、渡邊勇助訳『ユマニズム (人本主義) に就いて』(内観書房, 昭和4年)の附録 (1-18頁) を参照。
29. J.S. Mackenzie, *Lectures on Humanism*, London Swan

- Sonnesehein & Co. Limited, 1907.
30. ここで引用されたバルフォアとは、心霊協会の総裁に就任したジェラルド・バルフォアであると推察される。
 31. J.S. Mackenzie, op. cit., 1907, pp.242-243.
 32. J.S. Mackenzie, introductory Note, in *Hegel's Educational Theory and Practice*, 1909, London Swan Sonnesehein & Co. Limited, pp. xiv-xv.
 33. Ibid., p. xvii.
 34. J.S. Mackenzie, The Ethical Aspect of Religious Education, in *Report of the Conference on New Ideals, 1916*, pp.14-24.
 35. Ibid., p.16.
 36. J.S. Mackenzie, The Idea of Creation, in *The Hibbert Journal*, 1922, Vol.21, No.2, p.8.
 37. この自己実現の過程については、拙稿「E. ホームズの「教育の新理想」としての「自己実現」概念— <well-being> と <wholeness> の探究にもとづいて— (教育哲学会編『教育哲学研究』第81号, pp.92-111) で詳細に論じた。
 38. こうしたイギリス新教育運動の枠組みの析出から得

- られる示唆は多々あるが、ここで最も強調したいのは、教育的価値に関する禁欲的態度であり、それにかかわる教育の経済超越の視座である。いうまでもなく、「出来高払い制」批判に象徴されるように、教育という営為の成果を合理論や市場原理の視角からだけで分析・評価してはならず、さらに、内面世界に介入する教育の営為そのものの禁欲性も堅持する必要がある。
39. これは本雑誌創刊号の編集宣言からの抜粋である。
L. P. Jacks & G. Dawes Hicks, Editorial, in *The Hibbert Journal*, Oct. 1902, pp.3-4.
 40. 本資料は、教育史の泰斗ゴードンによる先行研究 (Peter Gordon, *The Writings of Edmond Holmes: a reassessment and bibliography*, in *History of Education*, 1983, Vol.12, No.1, pp.15-24) に筆者が加筆修正を加えて作成したものである。

(付記)

本稿は平成14年度科学研究費基盤研究C(1)の研究助成金に基づく研究成果の一部である。

(受理日 平成15年9月11日)

The Religious Aspects of Freedom in New Education Thought in Britain: Why did J.S. Mackenzie as a Philosopher commit to the Movement of New Ideals in Education?

Yoko YAMASAKI*

(Key words: Movement of New Ideals in Education, J.S. Mackenzie, M. Mackenzie, E.G.A. Holmes, New Education Movement in Britain, Meanings of Freedom, University of Cardiff)

The subject of education is closely connected with many dimensions concerning with their world. For example, the state education is not free from society, religion, economy, and politics. How should we think about 'Freedom' in and for education? These have been fundamental questions since the time of birth of public education system. Lead by such questions, in order to explore the stance and framework constructed by the theoretical relationship between religion and society in education, this article aims to make clear the religious aspect of the word of 'Freedom' in the New Educational Movement, especially the Movement of New Ideals Education (MNIE, 1914-1939) in Britain by focusing the philosophy of J.S. Mackenzie (1860-1935) who was known as a neo-Hegelian, a brilliant pupil of Edward Caird (1835-1908) in Britain, and chief Professor of department of philosophy in University of Cardiff in Wales. The main reasons of focusing him after his retiring from university are that he participated in MNIE with his wife-M. Mackenzie (1863-1942), who was also a professor of Education in University of Cardiff, and that his cooperation with MINE carried significant ideas about religious aspects of Freedom in education. Therefore, the question why he committed to MINE appears here as a sub-title. And characteristics in this article is that lifelong activities of both E.G. Holmes (1850-1936) who was chief Her Majesty's Inspector and M. Mackenzie, his wife are described.

In the conclusion four points emerge as following; (a) J.S. Mackenzie's main subject in his life was to explore *something* of the metaphysical implications of Humanism, and after the *Construction of Social Philosophy* he considered about both of cosmos as wholeness and the spirit as human nature, neither *tabula rasa* nor *original sin*, and he explored happiness on the earth (b) originally the background of the ideas came from critics both of the way of Modern West-centred Philosophy and the sectionalism of religion in the West, (c) therefore, his interest trended to East Philosophy like Upanishads and of Mysticism concerning with *the secrets of Nature*, and he made sure that the work of Philosophy should proceed to the direction of getting insight freedom of human being in education, and (d) so similarly this means synthesis with social, religious, and educational themes in the twentieth century, and it was a sub-framework to participants of MNIE. The quest of insight freedom, therefore, became the fundamental work to pioneers in education which he grasped as the essential work of precedent generation, and MNIE headed toward assimilating Humanism and Eastern Thought, which enjoyed making criticism for westernization based on Lock's idea of *tabula rasa* and Christianity of *original sin* for children.

This article consists of following five sections;

- I. Introduction: the questions and the stance in this article
- II. Social Dimension in New Education Movement
- III. 'New Ideals in Education' and academic people in Universities: Exploration of social and religious subjects in Philosophy
- IV. The fundamental Quest of J.S. Mackenzie: How was the spirit of human being interpreted by him?
- V. Conclusion: the Religious freedom as sub-framework in New Education Movement

* Dept. of Basic Human Science for Integrated Studies, Naruto University of Education, Japan